

今西 一著

『近代日本の差別と村落』

富山 一郎

既成の言葉では、どうしても表現できない領域というものがあ
る。それは、用語の使用上の問題ではなく、その言葉が採用され
たこと自体が引きおこす、強いられた沈黙である。私は、過去を
語る歴史学において必要される作業の一つに、従来の歴史学の言
葉が何を語られない過去として放置してきたのかという点の検討
があると考える。また、フーコーが暴いたように真理も強いられ
た沈黙の上に存在するとしたら、この検討作業は、真実の歴史と
虚偽の歴史という区分によりなされるのではなく、個々の言葉が
持つ言説空間を一つ一つ洗い出すものでなければならぬはずだ。
本書で扱われている「近代」そして「差別」も、そうした検討対
象に他ならない。

今西一の新著は、これまでの歴史学の言葉では語れなかった領
域に足をつっこみ始めている。また唐突だが、本書を読んで、す
ぐれた歴史家は意図せずして歴史の脱構築化へ進んでしまおうと
あるデリダリアンが述べたことを思いだした。ここで、あえて脱構
築という言葉を出したのは、今西が目を書えようとしている領域

とそれを表現し説明する言葉が剝離し出し、文字どおり従来の歴
史学の言説が解体し始めているように感じたからだ。こうした剝
離は、人によってはまとまりのなさや評するかもしれない。しか
し、今西が本書でふみこんだ足跡を浮き上がらせようとする私に
とって、この剝離感は大切にしたい書評の出発点だ。

* * *

本書は、緒論を除けば「解放令」前後（第一部）、新政反対一
揆と被差別民（第二部）、研究史について（第三部）の三部構成に
なっている。緒論にも繰り返し指摘されているように、本書の内
容を徹底しているのは、近代の部落差別を「生活共同体」とへ支
配共同体との対抗関係」（『本書』三頁）でとらえるという視角
である。この視角には、二つのコンテクストが含意されている。

一つは、部落差別をへ支配―被支配」という二分法的に制度化さ
れた領域と、生活あるいは生活意識という制度化されない規範や
慣習の領域の二つの領域で考えるという重層的な視角であり、今
一つはこの二つの領域にまたがる存在として共同体を設定しよう
とする意図である。さらに付け加えるなら、生活意識に共同体と
いう問題を設定したことにより、これまでに民衆運動史研究の中
でたびたび問題にされてきた、運動の結集軸としての集合心性と
それが持つ排除の側面という共同体の持つ両義的性格を、部落差
別との関わりで検討することになるのである。この点は、とりわ
け第二部の新政反対一揆の分析における中心テーマとなっている。
まず、一部と二部を中心に内容を要約しよう。一部は、『解放
令』前夜の被差別民の生活、「大和における一老農の生涯」の二
つの論考により構成されている。最初の『解放令』前夜の被差別

民の生活」では、京都府丹後地域を事例として、ムラという「生活共同体」に関わる非人、鉢、穢多への差別や生活史が検討されている。そこでの主要な具体的課題は、「解放令」以後、非人への差別が圧倒的に「解消」するのに対して、なぜ鉢・穢多への差別が残存していたのかという点である。

この課題に対して今西は、天皇制国家のもとでの中央集権的な地方行政機構を作り上げたところに「解放令」の意味があるとしたり、次で次のように説明する。すなわち、こうした行政機構の近代化の中で、個人人的に番人頭から支配を受けていた非人は、その頭支配が否定されただけではなく、近代的な国家警察制度が整う中で共同体からも切り放されていくのに対して、「頭村」支配と、「本村付」支配の二重支配をうけていた穢多は、前者の解消と後者の存続という形態を取るといふ。いいかえれば、非人差別と穢多差別のこうした差異こそ、行政機構の展開が強圧的に先行した日本の近代における、近世的な支配共同体の消滅と生活共同体の存続という重層的な展開を表現しているのである。

次の「大和における一老農の生涯」は、老農である中村直三の評伝である。ここでは、老農にたいする安丸良夫の「通俗道徳」論の論理構成を受け継ぎながら、従来の中村直三論では正面に据えられることのなかった、非人番としての中村直三像がとりあげられている。この読みごたえのある評伝の中で、今西は直三の生き方に内在する徹底した平等性・無私性・献身性の底流に、「非人番」ゆえの差別に対する憎悪と、自らをけがれた存在としてみなししてしまう直三自身の「賤人」意識を見いだす。

この差別を憎む一方で差別を受け入れ自らを蔑視するというア

ンビバレントな精神に、今西は林達夫の「反語的順応主義」という言葉を当てている。この理解は、「通俗道徳」を上からの支配であると同時に下からの解放であるとみなす安丸の論における、上と下の結節点という単純な場所論的メタファーともよめる理解を、アイデンティティーに関わる主体性の問題としてとらえようとするものであり、主体性を歴史学の基軸に据え続ける今西の一貫した歴史観がみちびいた卓越した見解であると考える。しかし同時に、この「反語的順応主義」という概念がはらむ「主体」と主体の二重のありように、歴史学が踏み込むことの恐ろさと必要とされる手続きについては、後述しなければならぬと考える。

第二部は「新政反対一揆の概観と『脂取り一揆』」、「新政反対一揆と民衆的想像力」、「播但一揆」、「美作『血税』一揆」の四つの論文から構成されている。ここでは、民衆の共同体意識に注目しながら新政反対一揆の差別排外主義的な側面が執拗に論じられている。「歴史を作るのは民衆の闘争である」というのは基本的に正しい命題である。しかし、民衆の闘争が常に正しく進歩的である、というのは一種のドグマである（『本書』九三頁）のだ。まず「新政反対一揆の概観と『脂取り一揆』」では、土佐のいわゆる「脂取り一揆」をとりあげ、新政反対一揆の底流には、民衆の共同体意識に基づく異人への恐怖が存在し、そうであるがゆえにシヨビーニズムと部落襲撃へ結びつくとしている。すなわち、一揆の底流に共同体意識に基づく集合心性を設定し、その集合心性を他者（異人）への恐怖という側面で把握しようとしている。こうした集合心性は、次の「新政反対一揆と民衆的想像力」でもより中心的に検討されている。ここでは異人への恐怖が、民衆の「民

俗的世界」にルーツをもつ一方で、それが行商人等を媒介とした流言蜚語により伝播し拡大していったことが指摘されている。

こうした民衆の「大恐怖」の理解では、明らかにG・ルフェールの名著『一七八九年の大恐怖』(La Grande Peur de 1789)が意識されている。しかしそれと同時に、恐怖の伝播をショールビニズムの形成として設定している点は、B・アンダーソンが指摘している近代ナショナリズムにおける「想像の共同体」(imagined communities)にも通じているといえる^①。その結果、部落襲撃はナショナリズムの問題へ展開することになる。今西の新政反対一揆の分析は、近代日本のナショナリズム形成の起点に、民衆による部落襲撃が存在していることを示しているともいえるのだ。これは、緒論でもふれられている近代天皇制国家の「血統神話」Ⅱ種姓観念の創出を考えると、極めて重要な論点である。またこうしたナショナリズムの形成という点に注目するならば、今西が部落襲撃に対し、基本的には旧慣維持という評価を与えていることには疑問が残る。支配の共同体の急激な展開に対する生活の共同体の残存というだけでは、ナショナリズムの問題は登場しないはずだ。この点はあとで再びとりあげるが、続く「播但一揆」「美作『血税』一揆」の両論文で描かれている、生々しい部落襲撃の暴力性に対する今西の評価についても、同様の疑問が生じる。

「播但一揆」では、年貢減免闘争として把握されていた同一一揆の、「解放令」反対に関わる差別的な側面が、一揆の展開過程の克明な検討から強調されている。この新政反対一揆がもつ差別性について、一方で「未開」という「解放令」以後、新たに意味付けされた『差別』を指摘しつつも、強引な同質化に対す

る「一般村民の側からの『旧慣』Ⅱ共同体維持の闘争」(『同書』一五八頁)だという見解が提示されている。この近世的な共同体維持として部落襲撃を理解する認識は、次の「美作『血税』一揆」ではより明確になる。岡山県美作で起きた「血税」反対一揆の底流には、「血取り」や「子取り」という流言蜚語の伝播があり、そこに近世的な共同体意識に基づく異人への恐怖が存在した。そして、そうであるが故に同一一揆は、異人Ⅱ磯多への襲撃へ展開していくのである。したがって部落襲撃の差別性は、「解放令」にみられる「上からの強権的な『同一化』」に対して近世的な共同体を守ろうとする農民の危機意識のあらわれとして理解されることになる。

確かに播但一揆にしても、美作「血税」一揆にしても、その底流には近世的な共同体意識や種姓観念にもとづく旧慣維持という主張が存在している。こうした心性の領域に目を据えた視座は、高く評価されるべきである。そして、このまったく正しい視座を貫き通すためにも、心性や日常性に関わるモラルや規範を静態的で類型的な民衆世界としてしまわないよう、細心の注意を払わなくてはならない。もちろん今西自身そんなことは、百も承知だろうが、部落襲撃にはらむ旧慣維持の側面の強調に関しては疑問が残る。

具体的にいえば、近世的な共同体維持というだけでは、なぜ守るべき「我々」の世界が、ムラやムラビトではなくて「日本」や「日本人」として語られるのか説明がつかない。また、美作での一揆における「津川原の虐殺」にみられるように、村の枠を越えて組織された集合行為の被差別民に対する容赦のない暴力は、果

たして近世的な種姓觀念やげれの延長線上にあるといえるのだろうか。たとえその主張が、近世的なイデオロムでなされているとしても、それは現在に対立する過去そのものでは決してなく、その時点において想像された産物として、あえていえばメタファーとして理解されなければならないはずである。そうであるが故に「民衆的理想力」なのであり、「想像された共同体」なのである。ある範型を近代とみなし、それからこぼれ落ちる部分を伝統あるいは近世とみなしてしまふ理解そのものが問われている今、性急に近代と伝統の区分を行うよりも、さしあたり個別具体的にプロセスを追っていくことこそが今重要であると考ええる。しかし最初に述べたことと関連するが、「評価の近代主義」(『同書』九四頁)を乗り越えるのは真実の歴史ではない。この点は最後に述べよう。

* * *

以上の内容の検討をふまえながら、二点ほど論点を提示しておきたい。第一点目は、新政反対一揆の部落襲撃に見られる民衆の暴力の問題である。近世社会においても当然部落差別事件は存在しただろうが、やはり美作の一揆にみられたような村を越えた農民の集合行為により被差別部落民を襲撃し虐殺するという徹底したホロコーストは、従来からのケガレや種姓觀念から直接説明されるのではなく、何らかの媒介環、飛躍が必要であると考える。

川村邦光はこの飛躍を、新たな異人の析出と「恐怖」排除の心性の再組織化と表現しているが、いかえればそれは、他者の排除により担われていた「主体化」の新たな展開ということである。この問題を心の病に注目して考えようとした川村は、治療可能な悪き物から收容され隔離される「脳病」という排除の様式の

変化に、近代における主体形成のプロセスを見ようとしている。あるいは、スリランカにおけるタミール人とシンハラ人の互いのジェノサイドを検討した田中雅一は、宗教の世俗化にともなう道徳的な主体構成の展開とそれを支え、徹底化する「規律・訓練」の施設の登場が、儀礼的な他者の排除から他者の虐殺へとという暴力の変容を促していくと指摘している。そしてこうした儀礼的暴力の変容に、他者を常時周辺に追いやり殺害する、国家に囲いこまれた市民という主体の誕生のプロセスを見ようとするのだ。祭から戦争へ。R・カイヨワがいうように、「祭がその本質において、人々の集まり合体しようとする意志であるのに反して、戦争はこわし傷をつけようとする意志」としたら、近代と呼ばれる時代の大量虐殺の発生には、こうした人々の心性の変化が隠されている。

異人の問題は、歴史のプロセスの中で動態的に扱われる必要がある。そしてこうした設定により、他者への態度と主体構成の歴史の変容が浮き彫りにされ、そこから暴力の問題がみえてくるのではない。民俗学が幾度となく議論してきたケガレと清め、そしてこうした儀礼的な行為により営まれていた主体構成が、歴史の展開の中でどのような変化のプロセスをたどるのか。そしてかかる主体構成の変化にともなう暴力の変容とはいかなるものなのか。いちいちあげることは控えるが、本書の論述からは、こうした問題を解く用意があることを十分看取できる。それは今西自身もこだわっているように思える身分差別が近代差別かなどという議論より、もっと豊かな展開を予感させるものである。

第二番目の論点は、ナシヨナリズムについてである。「恐怖」排除の心性」の再組織化は民衆の暴力の問題だけではなく、「想

像の「共同体」としての日本ナシヨナリズムの問題でもある。人々は、お互いに同じ恐怖を共有しているはずだと想像し、守るべき我々「日本人」という「想像の共同体」を生み出していった。

本書ではこうした「想像」のプロセスにおいて、旅人や行商人の役割が指摘されている。近世において情報は領主権力により独占されていた。本書からは、こうした領主の情報に対抗する形で民衆の情報網が形成され、それがナシヨナリズムの形成と深く関係していることを十分うかがわせる。B・アンダーソンもナシヨナリズムの形成において旅人や巡礼者の役割を重視しているが、こうした観点からも今後の研究の展開を期待したい。

また、こうした恐怖の伝播において、被差別部落民へのケガレ意識が外国人という新たな他者像とつながっていることは、日本のナシヨナリズムがその起点から民衆の生活世界に根をおろした差別排外主義的な性格を帯びていたことを示すものであり、逆にいえば近代の部落差別が、まさしくこうした民衆の中のシヨビニズムの展開の中で解かれなければならない問題であることを示唆している。乱暴に言えばこの問題は、金静美が激しく指弾する水平社の排外主義的性格や、姜尚中らの指摘する「日本的オリエンタリズム」の問題とも関連していくだろう。

更に、日本のナシヨナリズムの底流に、こうした民衆の生活に根ざした身体性を帯びた他者者への排除があるとしたら、近代天皇制の基軸である「血統神話」すなわち種姓概念とは、制度的に民衆に押しつけられたものというだけではなく、あえていえば多様で豊富な言説により構成される「民衆的想像力」を基盤にしているといえる。「公定ナシヨナリズム」のなかでアンダーソンは、

民衆のナシヨナリズム形成を前にした君主制の生き残り作戦として、「想像の共同体」への君主の帰化 (naturalization) という問題を指摘しているが、この問題は、共同体を想像する我々の心に潜む、内なる天皇制という極めて重たい課題を提出するだろう。

歴史学もまた近代の産物であり、ホブズボウムがざりげなく指摘したように、近代という時代を保証し、その秩序を維持する過去を作り上げる「伝統の創造」こそ、これまで歴史学が為し得てきた作業なのである。また「評価の近代主義」をのりこえるとは、より科学的な分析を行うとか、縦のものを横に並びかえるといったことではなく、歴史学が持っていた言葉により語り得なかった沈黙の扉を少しづつひらいていく作業なのだ。最初にも述べたように、すぐれた歴史家はこれまでの言葉では語り得なかったこの沈黙の領域に足をふみだしてしまうのである。その沈黙が、言葉自身に関わるものである以上、この作業は新たに生み出された言葉により過去が構成されはじめ、これまでの言葉が解体しはじめることに他ならない。これは決して気持ちのいいものではない。過去に新たな語りかけを行うと、過去からはこれまでの安定をゆががず、不気味で不安をかき立てる声が返ってくるのである。

本書も随所でこうした不安をかき立てている。さきに暴力やナシヨナリズムといった論点を指摘したのも、本書が踏み込んでいる領域を、私なりの言葉で指摘したからだ。しかし最も不安をかき立てたのは、今西が中村直三の思想の背後に「反語的順応主義」という言葉を与えた点である。最後にこの言葉が持つ重大さについてふれておこう。

林達夫がファンズムの時代の「絶望の戦術」とよんだこの孤独

な抵抗では、支配の構成要素として自らを組み立て調教し、もはや誰が支配者で誰が被支配者なのか区別できなくなる「主体」のありようと、それでもなお、こうした「主体」に回収されない余剰としての主体とが想定されている。この「反語的順応主義」という言葉に含まれる「主体」と主体を、支配に順応するという偽装的戦略とその背後にある民衆のしたたかさというような、戦略的適応と戦略的主体とに類型化するのほまちがっている。戦略は戦略家を規定し作り上げるのであり、なにかしら即時的に主体があるなどと考えるはいけない。

「反語的順応主義」を支える主体とは、たとえば差別を受け、さらには自分自身を蔑視し、「賤夫」意識にさいなまれながらケガレを払拭すべく毎朝必死に身を清めようとする直三が、自らが蔑視する自己のぎりぎりの境界において発見する何かなのである。それは、あらかじめ存在しているものでもなければ、語るべき言葉が準備されているものでもなく、「主体」として自らを構成してきたプロセスが「想起」され、批判的にとらえかえされるなかで獲得される主体なのである。

「想起 (Remembering)」とは決して内省や回顧といった穏やかな営みではない。そうではなく、それは現在という時代に刻みこまれた精神的外傷を意味化するために寸断された過去を再び呼び起こし (re-membering)、構築するという痛みを伴う作業であるはずだ^⑩。

歴史学はこのような主体を扱うことができるだろうか。はっきりしていることは、前述した暴力や、ナシヨナリズムにはいつもうしろの主体の問題がつきまとうということであり、またこうし

た主体を無視しあらかじめ射程の外へ放棄してしまう態度からは、「評価の近代主義」をのりこえる試みは生まれないだろうということである。また、こうした主体に接触する際には、客観性、科学性ではなく、あえていえば「想起」を共有し得る倫理性を帯びた歴史意識というものが問われるに違いない。本書を読んで、改めて思い知らされた次第である。

- ⑩ Anderson, B., *Imagined Communities*, Verso, 1983. (白石隆・白石や訳「想像の共同体」リポポート、一九八七)
- ⑪ 川村邦光『幻視する近代空間』青弓社、一九九〇、三六頁。
- ⑫ 田中雅一「儀礼的暴力の変容―供儀からジメノサイドへの道程」『情況』四巻一号、一九九三
- ⑬ Caillots, R., *BELLEŒNE ou la pente de la guerre*, Renaissance du livre, 1963 (秋枝茂夫訳『戦争論』法政大出版局、一九七四)、『邦訳』二四六頁。
- ⑭ 福田アジオ『可能性としてのムラ社会』青弓社、一九九〇参照。
- ⑮ 金静美「朝鮮独立・反差別・反天皇制」『思想』七八六号、一九八九。
- ⑯ たとえば、姜尚中、「昭和の終焉と現代日本の『心象地理』歴史」『思想』七八六号、一九八九。
- ⑰ B・フンダーソン「前掲書」一五〇頁。
- ⑱ Hobsbawm, E. & Ranger, T., *The Invention of Tradition*, Cambridge, 1983 (前川啓治・梶原景昭他訳「創られた伝統」紀伊國屋書店、一九九二) p. 13.
- ⑲ Naoki Sakai, *Voices of the Past*, Cornell Univ. Press, 1991. 特に“introduction”を参照。
- ⑳ 林達夫『評論集』岩波書店、一九八二、一三五頁。
- ㉑ Ehabha, Homi K., 1986, 'Remembering Fanon: self, psyche, and the colonial condition', in F. Black Skin, White Masks,

trans. Markman Charles L., Pluto Press (マンソンを想起する)
と』『イブニング』三二七、一九九二) p. xxxiii.

(A5判 二二八頁 一九九三年四月 雄山閣三、三九八円)
(神戸市外国語大学助教授)